

水を現代的に生かすヴェネツィアの都市づくり

法政大学 陣内秀信

1. 一周遅れのトップランナー

ラグーナの水上に形成され、今なお車が入らず、歩行と船だけが移動手段の街、ヴェネツィア。近代化から取り残されたように見えるこの水の都市が、実は一周遅れのトップランナーのような役割を果たしてきたから不思議である。

ヴェネツィアは、二つの意味で、世界のまちづくりのモデルとなってきた。先ず、歩行者空間化である。ヨーロッパの都市の古い中心地区が、その魅力を取り戻すため、1980年頃から、公共交通としてLRT（次世代型路面電車）を導入しながら車を減らし、意欲的に歩行者空間化を進めるのに成功してきたが、車社会に慣れきった現代人に、街を歩くことの楽しさを教えてくれたのは、間違いなくヴェネツィアだった。しかも、ここではLRTの代わりに、今も、水上バスが大活躍をしている。

もう一つは、水辺を生かしたまちづくりだ。世界の都市でやはり80年頃から、ウォーターフロント再生の事業が活発に展開してきたが、そのモデルとなったのも、やはりヴェネツィアだった。世界中の数多くの専門家、行政担当者がこの水の都市を視察に訪ね、生き生きと使われる水辺空間のあり方からインスピレーションを受けてきたのだ（写真-1）。ここでは、水辺を生かしたまちづくりについて、ヴェネツィアの経験から考えてみたい。



写真-1 大運河沿いの渡し船の船着き場

2. 物流の歴史空間を生活と文化の現代空間へ

中世の時代、ヴェネツィアは「アドリア海の花嫁」とも呼ばれ、地中海に進出し、オリエントのビザンツ帝国とイスラーム世界との交易によって、巨大な富をなした。アルプスの北の国々との間をとりもつ中継貿易で稼いだのである。ラグーナの水の上につくられた浮島であり、中央を逆S字型に大運河がゆったり流れ、リオと呼ばれる細い運河が網目状に巡るヴェネツィアの街全体が、実は港の機能を受け持った（写真-2）。

アドリア海から来る船は、リドなどの細長い島の

間にある狭い海峡からラグーナに入り、水上に浮かぶヴェネツィアの本島を目指した。共和国時代は、その象徴的存在であるサン・マルコ地区を中心とする水辺に広範にわたって、東方貿易と結びついた本格的な港湾機能が分布しており、港町の活気に溢れていた。岸辺は荷揚げの場所で、船が



写真-2 16世紀のヴェネツィア（ヴァチカン美術館）

り、荷役の人々で岸辺は賑わいに満ちていた。

ところが、近代になり、そもそも東方貿易も含む諸外国との交易量は減っていたし、同時に、大型船が入る近代の港の建設が街の南西部に実現したため、すべての港湾機能がそこへ集中的に移動した。かつて荷揚げに使われた岸辺も、直接、船を付け荷揚げができた貴族の邸宅（パラッツォ）の正面玄関も、物流を担う港の機能をもつ必要がなくなった。

こうして港湾・物流の機能から解放された水辺は、新しい時代の価値観で、より人々の生活に結びついた多様な使い方へと転換することができた。そもそも、ヴェネツィアでは、東方貿易が衰退した16世紀のルネサンス以後、次の17-18世紀のバロック時代にかけて、交易・経済都市から文化都市、演劇・祝祭都市、ファッション都市へとその性格をソフトに変化させ、大運河に面した上流階級の館も、船で物資を運び込み、流通のビジネスを担う商館（フォンダコ）から、人々を招き、社交の宴をもつばら催すステイタス・シンボルとしての華麗な館（パラッツォ）へと性格を転じていた。大運河そのものも、物流の大動脈から、水面でしばしば祝祭、演劇的なイベントが繰り広げられる舞台としての性格をもつようになっていた。

その意味では、工業化の時代を抜け出て、物流からも解放された東京の水辺の転換する方向を見定めるのに、ヴェネツィアが経験したことは、きわめて示唆的なのである。

しかも、19世紀後半、近代港が西南部にできて、それまで港の機能を分担していたヴェネツィア中心部では、解放された水辺を時代のニーズに合わせて、人間のために使うことができるようになった。

同じく、運河が同心円状（幾何学的だが）に巡り、東インド会社の交易活動による物資がどんどん船で運び込まれたアムステルダムでも、その内部の運河には、かつての舟運機能がなくなったため、岸辺の荷役の役割は失われ、新たな時代の使い方が可能になったのだ。水辺の快適なカフェテラス、さらには優雅な水上生活のためのポートハウスが数多く係留されるようになった。運河が現役の港湾機能、物流機能をもっていたら、そんな人間の生活と結びついた機能は水辺に入りこむ余地はなかったのだ。

ヴェネツィアで起きた転換もそれとまったく同じ理屈で説明できる。さらに文化性を強くもって水辺空間を再生しているのが、この華麗なる水の都の特徴といえる。

3. 水辺空間のタイプ毎の現代的な機能・役割

水上に浮かぶ「水の都市」ヴェネツィアには、3つの水辺のタイプがある。第一のタイプは、本島のまわりに広がるラグーナに面した開放感のある岸辺だ。その最も象徴的で重要なのは、サン・マルコ広場への正面玄関にあたる小広場（ピアツェッタ）の前面の水辺と、そこから東に伸びるスキアヴォーニの岸辺である。そもそもスキアヴォーニの岸辺が今のように広々とした空間に拡大されたのは、比較的遅い時期である。ヴェネツィアの南に開く明るく輝くイメージのこの場所には、開放的なプロムナードが生まれる必然性があった。しかも、本来、港湾の中核だったサン・マルコ地区からこの東の一体には、物流の船がたくさん停泊していたが、今は観光用のゴンドラ、そして色々な系統の水上バスの乗り場などが集まる、人間のための舟運拠点となっている。観光の中心でもあるこの岸辺の館の多くはホテルに転用されている。

ラグーナに面した岸辺の使い方でもっとも私が好きなのは、やや西側に寄ったザッテレの岸辺に見られる。ここは、ザッテレという地名がそもそも「筏」を意味し、実際、大陸のブレンタ川を使って上流域の森林から切り出された木材が筏に組んで流され、最終的にこの岸辺に集められていたのだ。その流通機能からも解放された岸辺は、南向きの気持ちよい水辺のプロムナード



写真-3 ザッテレの岸辺の水上カフェ

として、市民に親しまれている。いくつかのカフェ、ピッツェリアが水上に杭を打って張り出しており、足元を波が洗う涼しげな水上テラス

で時間を過ごすのは、最高の気分だ。私も留学時代、何度も授業をエスケープし、ここで至福の時間を過ごした（写真-3）。もちろん、それぞれの店は場所の占有料を市役所に支払っている。契約社会の優れたシステムといえる。

第二のタイプは大運河沿いの空間で、水都ヴェネツィアで最も華やかな水辺である。貴族の館は、そのまま住まいとして使われているものも少なくないが、役所、大学、博物館・美術館、そして民間企業のオフィスなど、さまざまに転用されている。ピアノ・ノービレという主階にあたる2階、3階には、ヴェネツィア独特のバルコニーが水上に張り出し、そこからの水都の眺めは最高である。たくさんの船が行き交い、まさに水の大通りの感が



写真-4 カ・ドーロ（金の家）のバルコニーからの眺め

こうした館には、ホテルに転用されているものも少なくない。そもそも5つ星、4つ星のホテルであるためには、水上タクシーでそのまま直接乗り付けられることが求められる。したがって、水に正面玄関をもっていた貴族の館はホテルに転用するにも最適なのである（写真-5）。部屋の料金が運河側と裏手では大きく違うのは、言うまでもない。



写真-5 大運河沿いの貴族の邸宅を転用したホテル

大運河沿いの高級ホテルでは、一階の前面に洒落た水上テラスを張り出し、朝食を優雅に楽しめるように工夫して所が多い（写真-6）。こうした水上テラスも、館が物流機能を必要としなくなり、水際を人間のために活用できるようになった20世紀に入ってからのことである。



写真-6 大運河沿いのホテルの水上テラス

陣内研究室の博士課程に在籍し、ヴェネツィアに長く留学してこの水都の近代史を研究している樋渡彩氏によれば、こうした水上テラスの登場は1930年頃のことだという。ビエンナーレなど、ヴェネツィアの国際文化観光の興隆とともに創られ、普及した

ようである。我々が水都ヴェネツィアらしい特徴と
思っていることが、案外、近代の新しい時代に生み
出された産物なのだ。水都のイメージは近代にさら
に豊かに創られたと言える。

水辺の第三のタイプは、内部を巡るリオと呼ばれ
る小運河に沿った空間である。この毛細血管のよう
に街を巡る小運河が極めて重要である。水の循環が
悪くなれば、水質も悪化する。建物の修復工事にも、
引越しにも、日用品、食料などをそれぞれの地区に
運び込むにも、ゴミの回収にも、こうした小運河に
入り込む小船が活躍するのである。

個人所有のポートが、小運河沿いにたくさん係留
されている(写真-7)。

商店経営や他の職業に
も必要だが、遊びの目
的のポートも多い。申
請すればそれほど苦勞
しなくても、その権利
が得られるそうだ。ル
ールを設け、整然と公
有水面を皆で上手に使
っている光景は、学ぶ
ところが多い。洪水、
高潮の際に、水上の船



写真-7 小運河沿いに係留
されたポート群

が障害物になるというわが国固有の事情はわからな
くもないが、川や運河の水面から船の係留を締め出
す一辺倒の考え方は、一度、見直してもよいのでは
ないか。水門、閘門で守られている安定水面では、
特に再考が必要だと思える。

ヴェネツィアでは、1990年代頃から、運河の浚
渫が活発に進められている。冬場、水をせきとめ、浚
渫し、建物や護岸の基礎の補強工事が行われる。水
循環がよくなり、水質の改善が進む。

また、アックア・アルタ(高潮)対策として、運
河沿いの岸辺の道をかさ上げし、同時に、その下に
簡易浄化槽を設置する事業も一緒に実施される。こ
のように水都を維持するのに必要な、生活基盤の改
善のための地道な公共事業に力が注がれているので
ある。

運河沿いの建物の基礎を守るため、ポートが波を
立てないよう、速度制限が設けられている。水辺環
境を安定されるため、船の一方通行も、ここでは当
たり前である。

4. 市民生活と国際都市の営みを支える多彩な舟運

ヴェネツィアから最も学びたいのは、舟運につい
てである。東京でも、スカイツリーの誕生とともに、
舟運の見直し、復活が大きな話題になりつつある。

水上タクシーへの取り組みもいよいよ始まりつつあ
る。

ヴェネツィアでは、すでに述べたとおり、都市内
の移動は歩くか船しかない。船の種類は歴史的にも
数多くあった。有名なゴンドラはあくまで、その一
つのタイプに過ぎない。都市内でものを運ぶ小船は、
ものすごい数が日常的に利用されている。食料や建
材などだけでなく、郵便もゴミも船で運ばれ、霊柩
船、救急船、消防船の姿も時折見る。引越しにも船
が活躍する。リアルト市場には、朝早く行くと、数
多くの小船が昔どおり、野菜や果物、魚を載せて集
まっている。

バポレットと呼ばれる水上バスは、市民の生活に
欠かせない。行く先、そして快速か各駅止まりかな
どで何系統もあり、
時間もかなり正確
に運行している(写
真-8)。本数は少ない
が、深夜運行してい
るのも有難い。空港
から街までは、リム
ジン水上バスが運行
していて、便利であるが、ホテルの目の前に付けて
くれるわけではない。



写真-8 市民の足としての
水上バス

その点、水上タクシーが便利である。観光都市、
あるいは国際イベント、会議の多いコンヴェンショ
ン都市ともいってよいヴェネツィアには、これが必
要不可欠となっている。普通の街におけるタクシー
とまったく同じように電話一本で、ホテルやレスト
ランの目の前まで付けてくれる。階段状の船着場は、
大運河にも、小運河にも随所にとられていて、乗り
降りも簡単であ
る。水上タクシー
の業界の専用船着
場も駅やリアルト
橋の近くなどには
設置されている
(写真-9)。



写真-9 水上タクシーの乗り場

ヴェネツィアに
滞在する人々は誰

も、水上バス、水上タクシーにすっかりお世話にな
る。この街のビジターとしては、一般の観光客だ
けか、国際会議、学会への招待者、参加者も数多い。
その会場もサン・マルコの沖合いのサン・ジョルジ
ョ・マッジョーレ島にあるチーニ財団(修道院のコン
バージョン)や大運河沿いのパラッツォなど、い
ずれも船で直接乗りつけるのが当たり前だから、参
加者は、ホテルに迎えにくる水上タクシーで会場に

乗りつけ、終わったらまた船でホテルに戻り、そしてシャワーを浴びた後、また船でレストランに出向く、という夢のような体験をすることになる。こうした最高のもてなしで迎えるヴェネツィアからの招待を断る人は稀である。

発想を切り替えれば、東京でも会議場をベイエリアなどの水際につくり、運河沿いにホテルを配置すれば、それと同じことを簡単に実現できるはずなのだ。

国際的に知られ、大勢の人々を集めるヴェネツィア・ピエナーレのメイン会場である東のジャルデーノは、水上バスで行くことになる。船着場を降りると、すぐに正面ゲートがあるという段取りだ。この船によるアプローチの体験もいい。もちろん、映画祭が行われるのはリド島だから、本島に泊まりながら、船でリドの会場に行く人も多いだろう。

最近、古くは修道院だったサン・セルヴォロ島にヴェネツィア国際大学の本部がつけられていて、そこでの授業にも船で行く。私も招かれ、講演をしながらサン・ザッカリアから出る水上バスで出かけた。俗世界から隔絶されたかのような島での特別な時間。なかなか近代社会のなかで得がたい非日常的な体験を、ヴェネツィアは水の空間を最大限生かして与えてくれるのだ。

船でもう一つ面白いのは、公共交通機関として、大運河に5-6本ある渡し舟(トラゲット)で、100円もしない低価格で乗れる。大運河には、新たな北西のカトラヴァ橋を加えても4本しかないので、要所要所にある、大型のゴンドラのような格好の渡し舟は実に便利だ。通勤、通学にも、対岸のリアルト市場に買い物に行くにも、市民が日常的に利用する。

5. 冠水と付き合い水の恵みを楽しむ市民達

ヴェネツィアと言えば、冬場を中心としたアックア・アルタ(冠水)の風景がよく報道される。ラグーナのデリケートな環境にあるこの街は、歴史的にも常に冠水に悩まされ続けた。だが、近代の大陸側工業地帯での地下水汲み上げで地盤が沈下し、その被害が戦後、増大し続けてきたため、近年、可動式水門の設置を市当局もついに認め、その工事がいよいよ本格的に開始された。とはいえ、普段は海底に置かれており、いざ危ないときだけ、立ち上がる水門なので、景観を損ねることは一切無い。

多少のアックア・アルタは受け入れ、店舗やホテルの一階入口に水の浸入を防ぐ板を置き、街の低いエリアの移動には、備え付けの渡し板を通ると、いう具合に、辛抱強く水と付き合う。

こうした深刻な問題を抱えながら、ヴェネツィアでは、今も水上での祝祭、イベントが季節ごとに様々に行われ、市民はこの街の生活を楽しむ。9月第一日曜には、大運河を舞台に、「レガッタ・ストーリカ」(歴史的レガッタ)が盛大に行われ、ヴェネツィア共和国の栄光の歴史を物語る時代祭り風的水上パレードに引き続き、青年、女子、壮年男子など、さまざまなカテゴリーのレガッタが行われ、熱狂の渦に包まれる。



市民が最も愛する水上のイベントは、7月末のイル・レデ

写真-10 イル・レデントーレ教会の前夜祭 水上の宴会

礼と結びついた前夜祭の花火である。昼から思い思いに仕立てた無数の船がサン・マルコ広場の沖合いの広い水面に集結し、一大水上祝宴を長時間繰り広げて、花火の開始を待つ(写真-10)。打ち上げ開始は11時頃。30分ほど連続的に華やかに花火が打ち上げられるが、その振動で歴史的な建物に亀裂が入るのでは、と心配になるほど、景気よく花火が続く。終了すると、若者達はリドに移動して、夜明けを待ちながら祭りの余韻に浸るのが、ヴェネツィア子の楽しみらしい。

この二つの祝祭、イベントが伝統的なものなのに対し、比較的最近、活発になった水辺のイベントとして、5月に行われるヴォガロンガがある。1975年に、環境問題を起こすモータ付きの船を批判して始まったこの水上イベントは、手漕ぎの様々なボートが無数に集まり、タイムを競わずに楽しみながら、ラグーナを一周する。手漕ぎボートの市民マラソンという感じだ。水の環境を、そしてボートを漕ぐことを愛する人々によって行われるこのイベントは、今は世界中から人々を惹きつけるまでになっている(写真-11)。



写真-11 ヴォガロンガ カンナレージョ運河 撮影：樋渡彩氏

このように水害という災いを一方で受けながら、ヴェネツィアの

人々は、水都に暮らすメリットを存分に享受している。水の恵みを生活の中で最大限生かすこの水都の人々の経験からは学ぶことが実に多いのだ。